



やなぎっ子

立ち止まり、振り返る時

校長 萩原 哲哉

贈り物の 数を尽くして クリスマス (正岡子規・明治32年)

(たくさんの贈り物を交換しあい、幸せな気持ちになれる、それがクリスマス。)

明治32年と言えば、片柳小学校がまだ東尋常小学校、西尋常小学校の二か所にあった時代です。俳句ではじめて「クリスマス」の言葉を使ったのが、正岡子規であり、それ以来、「クリスマス」は、冬の季語になりました。現在のように華やかなものになるのは、戦後、デパートのイベントやセールとして取り上げられるようになってからだそうです。子規自身はこの折にはもう病床にいましたから、句は想像した情景ですが、当時から贈り物を送り合う、華やかなイメージがあったのですね。

クリスマスの価値について、以前考えたことがあります。「華やかで楽しければいいじゃないか」という声も聞こえてきそうですが、それだけ(ただ騒ぐだけ)の文化だとしたら、日本にこれほど根付くはずがないのでは、と思ったことがきっかけでした。正式に学問的視点から考えたわけではありませんが、その頃、なるほど、と納得できた答えが、当時の英国首相の言葉。何かの特番で紹介されたものを、たまたま書き留めておいたものです。

「(クリスマスは)立ち止まって、自分の周りにある大切なものについて、じっくり考える機会をくれる時間。それは、過ぎ去った1年を振り返り、翌年の備えをするための時間でもある。」

(キャメロン元首相(イギリス))

コロナウイルスの流行によって、「街はにぎやか お祭り騒ぎ(「チキンライス」)」の光景は、今年は控えめになりそうですが、だからこそ「自分にとってこの一年って・・・」「自分がこの一年、過ごすことができたのは、〇〇のおかげ」等、ゆっくりと、かつじっくりと、考える時間にしていければと思います。

楽しい光景は、子規に倣(なら)い、「想像の世界」で「際限なく」。楽しい光景を想像したあとは、来るべき来年に向けて、心と体の備えを進めたいと思います。

俳句ではじめた文章ですので、結びも俳句で失礼いたします。

去年(こそ)今年 貫(つらぬ)く棒の 如(ごと)きもの (高浜虚子)

(古い年が明け、お正月のお祝いをする時、前の年がずいぶん昔のもののように感じられるが、実際は一本の棒で貫かれた、連続した時間であることよ。)